

県知事選挙結果について

○9月30日投開票の第13回沖縄県知事選挙「佐喜真淳（自民党、公明党、維新、希望推薦）」は、共産党、社民党などオール沖縄が推した「玉城デニー」に敗れ、県政奪還はならなかった。

結果は、自民党、公明党そして維新の会が推薦し必勝の体制が出来た中で、80,174票と言う大差で敗れた。

○「沖縄の未来をひらく県民の会」の下、県出身自民党国会議員、1区～4区の衆議院選挙区支部、県経済界、自民党、公明党及び維新の会の県議、保守系首町、市町村議員等、総結集した選挙体制を構築し、総力戦を展開した。

○今回の一連の県知事選や那覇市長選挙、豊見城市長選挙で明らかとなったことは、自民党県連に対し、これまでのような選挙への対応のあり方や政治姿勢では到底県民の理解を得ることは難しいと言うことである。

当初絶対に勝てると思われた、自公維体制、そして絶対的な候補者と思われた「現職の宜野湾市長である佐喜真淳」で大敗を喫した現実を、単に亡き翁長知事の「弔い合戦」に引き込まれたことだけが敗因、原因と決めつけては、検証、総括が中途半端な結果となりかねない。

同様なことは那覇市長選挙においても言えることである。

○豊見城市長選挙は、候補者の一本化が出来ずオール沖縄に漁夫の利を得さ占めたことで、市内の保守支持層からの批判が多い。

・今後に向け、市議、県議、を中心に豊見城市保守陣営の修復に向け取り組みを急がねばならない。

○那覇市長選挙は、県知事選の日程が替わり、候補者のあいさつ回りや街宣など、知事選優先の必要から戸惑いもあり、やりにくさだけが先に立った。

知事選敗北により運動がもろに影響を受け、党本部や企業の動員も大きな制限を受けた。

統一地方選挙終了直後で、議会準備のある中で、知事選と那覇市長選への対応は大変であった。

4年後の市政奪還に向け、国会議員、県議、市議や民間企業に加え、市民を加えた新たな組織を立ち上げる環境づくりが必要であると考えます。

自由民主党沖縄県支部連合会